

北清事変に際して作製された2万分の1「山海関」地形図（大阪大学蔵）

—解説と目録—

解説：小林 茂（大阪大学名誉教授・大阪観光大学）

目録：小林 基（大阪大学文学部学生）

日本陸軍は、19世紀末～20世紀初頭にかけて、中国大陸（旧満洲〔以下満洲という〕も含む）、朝鮮半島北部、さらに北樺太の各地で2万分の1地形図を作製した（清水2009: 179-181、小林ほか2012）。その多くは、日清戦争や日露戦争に際して、戦場やその後方の地域について作製されたもので、戦時という特殊状況を利用したものと考えられる。

このグループの地図と位置づけられる「山海関近傍」全15図幅を、この度2012年度科学研究費により古書として購入することができた。これらについて、すでに入手していた関連情報（小林2011: 106-107）にもとづきつつさらに調査をおこなったところ、その作製の背景がかなり明確になり始めることになった。測量（1900年）から刊行（1901年）までが短期間に進んだのもこの背景を反映していると考えられ、作成経過が不明の場合が多い外邦図には珍しい例といえる。以下ではこれらの点について報告するとともに、「山海関近傍」図全15点の目録を示したい。

1. 2万分の1地形図が作製された時期と地域

上記のような、縮尺2万分の1の外邦地形図が作成された地域については、すでに1940年3月発行の「外邦局地図一覧図（其一）」（小林ほか2010: 58参照）にしたがって一覧表を示しているが（小林ほか2012: 61）、これに1944年発行の「内邦地域地図整備目録」（長岡1993参照）に記載されている朝鮮半島北東部の2万分の1地形図（清水2009: 179-181）もくわえて、それぞれの地図群の測図時期、発行時期、図幅数を示したのが表1である。ここではまず表1を検討しながら、このグループの図の全容をみてみたい。

なお朝鮮半島北東部の2万分の1地形図は、日露戦争直後の1906～1907年に測図されたものであるが、のち韓国併合（1910年）により、カバーする地域が植民地になったために「内邦地域地図整備目録」に一覧図が掲載されることになったものである。従って、測図当時は「外邦局地図一覧図（其一）」に一

覧図が掲載された地図群と同じグループに属していたと考えて差し支えない。

測図年が判明していない地図群が少なくないが、判明しているものでは、19世紀末～20世紀初頭に集中する。また刊行年も多くはその時期であるが、これよりやや遅れる場合も見られる。

このように2万分の1図が集中してあられる背景については、本格的検討が必要であるが、1885（明治18）年に定められた「戦時測量班服務規則」の第3条に「測量地圖ノ比例尺ハ總圖ニ在テハ五萬分一分圖ニ在テハ二萬分一トス但シ樞要陣地ノ如キ精密ヲ要スルニ方テハ一萬分一或ハ其以上ノ例尺ヲ用ユルコトアリ」とあり、この分図の縮尺に準じて作製された可能性が大きいと考えられる。なお、「戦時測量班服務規則」は1882年に定められ、さらに1884年に改定された「戦時測量班服務假概測」をうけつぐもので、戦時期の測量班について、その目的や組織上の位置づけ、構成、適用する測量技術、構成員の任務分担を規定する（内閣記録局編1890: 554-559）。そこでは、総図だけでなく分図についても、測量に際しては基本的に平板（「小測板」）を、細部（「碎部」）の測量では画板に似た「携帯圖板」を用いるよう指示されている。平板上では水準器つきアリダード（「アリダードニベラトリス」）ならびにコンパス（「デクリナトアール」）、携帯図板上では小コンパス（「小デクリナトアール」）を用いることとなっていた。くわえて高度差をみるために「測山驗氣器」（気圧高度計と考えられる）を携帯すべしとしている。

なお、1941年に陸地測量部員として外邦測量の変遷を検討した高木菊三郎は、1907（明治40）年以降、その基本縮尺は10万分の1になったとしている（高木著・藤原編1992: 29-30）。さらに検討の余地があるが、2万分の1の縮尺は、この時期までの測量について適用され、以後はほとんど適用されなくなったと推測される。

三角測量を適用したものではないが、これらの2万分の1地形図は、小地域をカバーする地図群として十分な精度をもっており、また比較的大縮尺であ

表 1：19 世紀末～20 世紀初頭に作製された 2 万分の 1 地形図

番号	名 称	測図年	発行時期	図幅数
1	北樺太アレキサンドロフ近郊	不明	1906	4
2	山海関近傍	1900 年	1901 年 2 月 18 日	15
3	威海衛近傍	不明	1899 年	24
4	天津付近	不明	1913 年	12
5	保定近傍	不明	1923 年	9
6	漢陽以西漢水右岸地区	不明	1915 年	6
7	二万分一香港近傍	不明	1925 年	24
8	遼陽近傍	1904 年 11 月	1905 年 4 月 3 日	23
9	得利寺近傍	1905 年 2 月	1905 年 6 月	17
10	鳳凰城近傍	1904 年	1905 年	8
11	九連城近傍	1895, 1898, 1904 年	1895, 1896, 1898, 1904 年	14
12	析木城近傍	不明	1905 年	10
13	大石橋及蓋平近傍	1895, 1905 年	1905 年 5 月	26
14	營口近傍	不明	1905 年	4
15	海城近傍	不明	1905 年	15
16	図們江口会寧近傍、ただしのちに東側 139 図幅が羅津要塞近傍とされた	1906, 1907 年	不明	171

るところから、作図された地域の景観をよく記録すると考えられる。筆者らがこの縮尺の地図群に注目し、収集してきたのは（小林ほか 2012）、これらを収蔵する機関がほとんどないことにくわえ、その精度や景観表現に注目するからである。

ところで、表 1 にみえる図群には、日清戦争・日露戦争の戦場を戦闘終了直後に測量しているものが少なくない。3. 威海衛近傍、8. 遼陽近傍、9. 得利寺近傍、10. 鳳凰城近傍、11. 九連城近傍、13. 大石橋及蓋平近傍などがそれにあたる。これらは、『明治廿七八年日清戦史』さらには『明治三十七八年日露戦史』の付図と一致する場合が少なくないところからすると、戦史用に作製された可能性が大きい。これに対して本稿で紹介する山海関に関する 2 万分の 1 地形図は、戦史用というより、別の役割を持っていた可能性が大きい。つぎにこの点について検討してみよう。

2. 北清事変における連合軍の山海関占領

表 1 にみえる 2 万分の 1 「山海関」地形図の測図年は 1900 年であり、北清事変（義和団事件）に際し

ての日本軍の出兵に関連するものであることがうかがわれる。北清事変に際して日本軍は連合軍の一員として出兵し、その山海関占領にも参加した。まずこの経過からみよう。

連合軍による北京陥落（1900 年 8 月 14 日）以後、義和団の掃討がおこなわれたが、占領は長期化すると考えられ、冬にそなえて戦略的要地山海関の占領が考えられるに至った。その大きな理由は山海関およびその南の秦皇島付近は、冬でもつよい季節風のため基本的に結氷せず、外部との連絡のための港湾として確保することが必要になったためである（参謀本部編 1904: 75-76、斎藤 2006: 294-299）。

9 月 29 日の連合軍艦隊司令官の会議でこれが決定されると、各国軍の進出が開始され、日本軍も海軍の陸戦隊 120 名を 10 月 2 日に山海関の定遠砲台付近に上陸させ、さらに陸軍の 2 中隊 230 名をやはり海路で送り、陸戦隊と交代させて占領を開始した。さらに 10 月 10 日に新派遣隊を送り、先に送った 2 中隊と交代させたほか、12 月 1 日にも少人数を送った。ただし日本軍は北清事変に際して派遣した兵員の多くを帰国させており、山海関に兵員を十分にふ

りむけることができず、その占領に関与した連合国のなかでは、少数を占めるに過ぎなかった。しかし冬が深まるとともに他の寄港地の結氷により、輸送拠点としての山海関の役割大きくなり、補給・通信関係の兵員が派遣された(参謀本部編 1904: 76-101)。

このような日本守備隊の駐留に関連して興味深いのは、12月3日の第五師団長山口素臣に対する報告で、限られた範囲ではあるが、山海関付近の2万分の1の「目算測圖」を添付している点である。地形や道路、市街地、堡壘の位置を図示しつつ、各国の占領箇所を示すもので、早くも10月に2名の将校の作業により作製されたことがわかる(アジア歴史資料センター資料「12月3日諸情報の摘要目算測図」Ref. C10071255700)。目算測図とは、コンパスで方位を確認し歩測で距離を測るような簡易測量で、偵察などに際し広くおこなわれたと考えられる(小林 2011: 131-133)。

なお、山海関の占領は各国によって軍事的な既得権と考えられ、その守備隊はその後も駐留を続け、1908年6月の報告によれば、フランス・イギリス・イタリアがなお山海関と秦皇島に少数の兵を置いていた(アジア歴史資料センター資料「第2号清駐軍北新(清の誤記)駐屯列国軍兵力並將校人名の件」Ref. C03022921500)。また山海関の日本軍守備隊をめぐってはたびたび紛争が発生しており、とくに1933年1月1日には、続く「熱河作戦」の前哨戦のようなかたちで、山海関の占領にいたる「山海関事件」が発生した点も留意される(安井 2003: 80-82, 125-126)。

3. 測図班の派遣

以上のような1900年秋の山海関への守備隊派遣にあわせて、陸地測量部の測図班の派遣が指令されたのは9月8日で、同13日頃には広島の子品港を出発し、天津で第五師団兵站監の秋山好古大佐(秦編 2005: 7)の指示する地域の測量に従事するよう指示された。指揮者の玉井清水大尉ほか15名という構成で、うち測量手は9名であった(アジア歴史資料センター資料「玉井大尉以下9名北清地方へ出張手当追給方申進の件」Ref. C09122721700)。その構成を表2に示している。玉井はこの時期長崎要塞で測量手18名と測量に従事しており(アジア歴史資料センター資料「33年10月4日、陸地測量部班長陸軍歩兵大尉玉井清水以下別紙の通測量の為め長崎要塞へ出張の件」Ref. C10127011200)、その半数をつれて出

発することになった。

なお以上の構成は、すでに触れた戦時測量班服務規則の第2条にほぼ沿うものであったと考えられている。そこでは班長(大尉)1名、一等測手(中[少]尉)2名、二等測手(文官)8名、書記(下士)1名、図手(文官)2名、印刷手(文官)2名とされている。

さて、このような測図班の主な測量地域は、岡田扇太郎の回想によれば、海岸部(塘沽)から北京に至る幹線道路の左右それぞれ4千メートルの範囲で、護衛兵にともなわれての作業となった(アジア歴史資料センター資料「外邦測量の沿革に関する座談会の件(1)」Ref. C04121449200)。また玉井大尉が腸チフスにかかったという。なお、岡田は5万分の1の縮尺による測図であったと回想しているが、表1の4.天津付近の図からすると、2万分の1の縮尺でも測量がおこなわれた可能性もあり、さらに検討を要する。

表2: 測図班の構成

職	氏名	陸地測量部修技 所入所卒業年次
陸軍歩兵大尉	玉井清水	—
陸地測量手	市川元作	—
	新井季吉	—
	松井哲次郎	—
	岡田扇太郎	—
	鈴木敏	—
	大西鍬?太郎	2期、1891卒
	菊池馨	5期、1897年卒
	大門敏三	—
	横瀬市造	5期、1897年卒

注: 陸地測量部の入所・卒業年次は、日本測量協会編(1952)による。

表 3：山海関附近偵察報告

篇	篇・章・節のタイトル	付図および参照図
第一篇	山海関附近一般ノ状況	
	第一章 山海関ノ位置及氣候	
	第二章 地形ノ略説	
	其一 関内	
	其二 関外	
	其三 附近一般	
	第三章 現在ノ防禦編成	
	其一 一般ノ要領	第一図
	其二 東方面ノ防禦	第二図、第三図、第四図
	其三 西方面ノ防禦	第五図
	其四 海方面ノ防禦	第六図、第七図、第八図、第九図
	其五 困廓ノ防禦	第十図
	第四章 要塞ノ兵備	第六図、第七図、第八図、第九図
	第五章 要塞ノ兵力	
	第六章 交通	
	其一 鉄道	
	其二 電信	
	其三 道路	
	第七章 徴發物件	
	其一 宿営力	
	其二 給養力	
	其三 運搬材料	
第二編	山海関ノ攻略及攻略後ニ於ケル諸般ノ設計	
	第八章 山海関及其附近ニ於ケル上陸点ノ撰定並其設備	
	其一 上陸点ノ撰定	第十一図、第十二図
	其二 上陸ノ設備	
	第九章 山海関ノ防禦ヲ撃破シ之ヲ占領スル為メノ計畫及之ニ用フル兵力ノ大小種類	第十三図、第十四図
	第十章 山海関若クハ其附近ニ上陸シ直隸平野若クハ滿州ニ向テ作戰スル軍ノ根拠地ノ撰定	第十五図、三十万分一図参照、第十六図
	第十一章 山海関若クハ其附近ニ撰定シタル根據地ヨリ東西方向ニ進出スル難易ノ判断及進出ノ計画	第十五図、第十六図
	其一 西方ニ向テノ進出	
	其二 当方ニ向テノ進出	
	第十二章 上陸点ト鉄道ト連絡ヲ要スルノ有無又之ヲ要スレハ其設計及之ノ関スル材料ノ調査	第十七図、第十八図

注(1) アジア歴史資料センター資料「北清視察報告、陸軍歩兵中佐明石元二郎、陸軍砲兵少佐筑紫熊七、陸軍歩兵大尉西川庸次郎」Ref. C09122606900, C09122607000, C09122607100, C09122607200, C09122607300, C09122607400, C09122607500, C09122607600, C09122607700, C09122607800, C09122607900, C09122608000, C09122608100, C09122608200, C09122608300) による。

(2) 冒頭の目次と本文の表題が違う場合は、後者を優先した。

4. 山海関附近での測量とその成果の意義

このような測量班から測量手2名を、山海関付近の測量のため歩兵少佐明石元二郎のもとに派遣するよう玉井大佐に指示が出されたのは10月15日であった（アジア歴史資料センター資料「山海関附近測量従事測量手2名明石少佐に附属せしむべき事」Ref. C09122641200）。日付からすれば、日本軍守備隊の山海関到着後間もない頃である。表2にみえる9名の測量手のうち誰が派遣されたのかは不明であるが、その測量が明石少佐らの任務に関わるものであったことに疑問の余地はない。明石らは当時参謀本部第三部員で（秦編2005:6）、山海関に関連する偵察を指示されていた（斎藤2006:305-306）。1900年12月に提出されたその報告（明石および陸軍砲兵少佐筑紫熊七ならびに陸軍歩兵大尉西川席次郎の連名による「北清偵察報告」）の主体は山海関に関連するもので（「山海関附近偵察報告」）、その目次を示すと表3のようになる。

表の目次を見るだけでも、山海関およびその附近の予想される軍事行動について、さまざまな想定を

おこないつつ詳しく検討していることがわかる。残念ながらこの報告書には本文に参照が指示される図が添付されていないが、そのほとんどが地図あるいは堡塁の平面図であったことがうかがえる。測図班の測量成果は、こうした図の元図として重要であったことが推定されることになる。

表1に見られるように、ここで紹介する地図群の印刷は、翌1901年1月～2月に発行された。現場に駐留する守備隊のためにも急いで製図されたと考えられる。

なお図1は、以上のような山海関近傍地形図の一覧図、さらに図2は、このうち「山海関」図幅の主要部を示している。清朝末期の山海関の景観を示す図として、本図群が多方面で利用されることが期待される。また、ここに掲載している部分をふくめた本図群は、『明治三十年清國事變戦史、巻5』付載の「山海関附近列國占領位置略圖」（2万分の1）ならびに「秦皇島附近列國占領位置略圖」（5万分の1）（参謀本部編1904:106-107）の元図として利用されていることを付記しておきたい。

				3 望夫石 (1901)	1 老軍屯 (1901)
13 張家馬攻 (1901)	10 歸堤寨 (1901)	8 十二里舖 (1901)	6 紅瓦店 (1901)	4 山海関 (1901)	2 賀家屯 (1901)
14 牛頭崖 (1901)	11 赤土山 (1901)	9 秦王島 (1901)	7 東李庄 (1901)	5 唐子寨 (1901)	
15 洋河口 (1901)	12 金山嘴 (1901)				

図1：山海関近傍地形図一覧図

注：括弧内は発行年（西暦）。太線内は「一般ニ發賣セス」と注記がある。

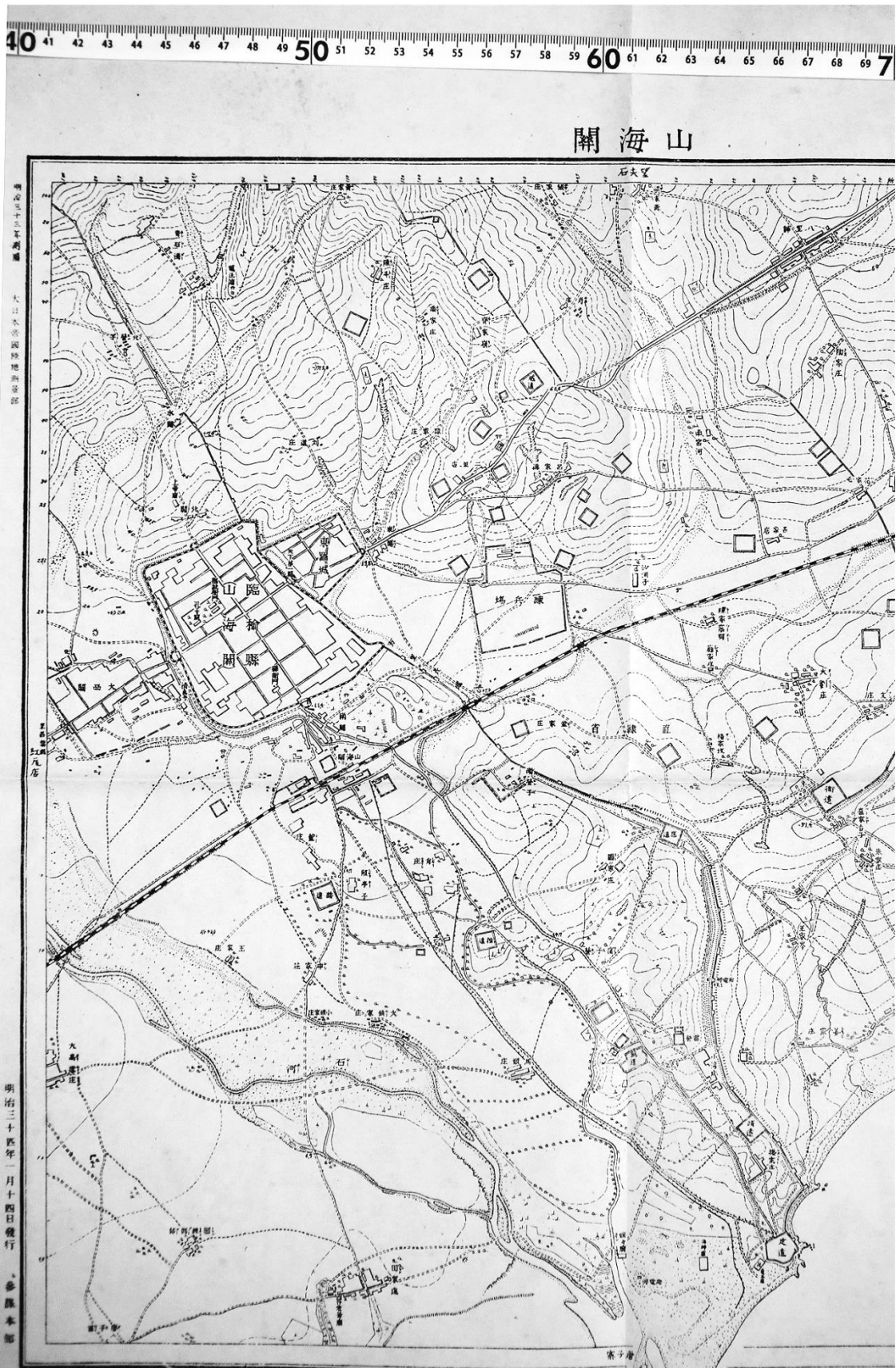


図 2: 2 万分の 1 地形図「山海関」

表 4 : 山海関 2 万分の 1 地形図目録 (大阪大学蔵)

図幅名	縮尺	測図年	測量者	発行年月日	発行者	サイズ (cm)	備考
老軍屯	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 2 月 18 日発行	参謀本部	57.8 × 45.6	
賀家屯	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 2 月 18 日発行	参謀本部	57.7 × 45.8	
望夫石	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年?	参謀本部 か? (「部」の 文字のみ 読み取れ る)	57.8 × 45.9	発行年月日は判 読困難だが、「十 四年」という文 字は読み取れ る。
山海関	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 1 月 14 日発行	参謀本部	57.9 × 45.4	
唐子寨	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 2 月 18 日発行	参謀本部	57.9 × 45.4	
紅瓦店	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 ■ 月 14 日発行 (■は 不明)	参謀本部	57.8 × 45.6	
東季庄	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 2 月 18 日発行	参謀本部	57.8 × 45.5	
二十里舖	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 2 月 18 日発行	参謀本部	57.9 × 45.4	
秦王嶋	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 2 月 28 日発行	参謀本部	58.0 × 45.4	
歸堤寨	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 2 月 18 日発行	参謀本部	57.9 × 45.6	
赤土山	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 2 月 18 日発行	参謀本部	57.9 × 46.0	
金山嘴	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 2 月 18 日発行	参謀本部	57.8 × 46.0	
張家馬攻	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 2 月 18 日発行	参謀本部	57.9 × 45.9	
牛頭崖	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 2 月 18 日発行	参謀本部	57.8 × 45.4	
洋河口	2 万分 1	1900 (明治 33 年)	大日本帝国陸地測量部	明治 34 年 2 月 18 日発行	参謀本部	57.9 × 45.4	

文献

小林茂 2011. 『外邦図：帝国日本のアジア地図』中央公
論新社 (中公新書 2119).

小林茂・小嶋梓・多田隈健一・顧立舒 2012. 「日清・
日露戦争期に臨時測図部が中国大陸で作製した地形
図 (大阪大学蔵)」外邦図研究ニューズレター
9:59-65.

斎藤聖二 2006. 『北清事変と日本軍』芙蓉書房出版.
参謀本部編 1904. 『明治三十年清國事變戦史、巻 5』川
流堂小林又七.

高木菊三郎著・藤原彰解説 1992. 『外邦兵要地図整備

誌』不二出版.

内閣記録局編 1890. 1988 復刻. 『法規分類大全 46、兵
制門(2)』原書房.

日本測量協会編 1952. 『陸地測量部修技所、同教育部、
地理調査所技術員養成所卒業名簿』日本測量協会
秦郁彦編 2005. 『日本陸海軍総合事典 [第 2 版]』東京
大学出版会.

安井三吉 2003. 『柳条湖事件から盧溝橋事件へ：一九
三〇年代華北をめぐる日中の対抗』研文出版.